

第1章 多賀城廃寺小考―尊像と塔から―

堀 裕

はじめに

陸奥国の国府が置かれていた多賀城跡から南東に行くと、多賀城とほぼ同じ時期に建立された多賀城附属寺院の多賀城廃寺がある。最初の本格的調査は、一九六〇年代に始まる。

その成果は、一九七〇年に刊行された『多賀城跡調査報告Ⅰ―多賀城廃寺跡―』（以下『報告書』と略す⁽¹⁾）にまとめられた。伽藍の主要部分は、おおむねこの時に調査され、観世音寺式伽藍配置であることや、多賀城との密接な関係が確認された。その後、小子房や伽藍東南部の丘陵中腹の遺構などが見つかった⁽²⁾。

調査・研究成果を踏まえ、八世紀前半の創建期多賀城廃寺の伽藍の様子をみてみよう。観世音寺式伽藍配置をとり、伽藍中軸線より西側にある金堂は東向きに建ち、伽藍中軸線より東側には塔が建立された。塔は、三重の塔と想定されている。伽藍中軸線には、南面して講堂と考えられる建物が建つ。この講堂と中門に接続し、金堂と塔を囲むように築地塀が廻らされていた。講堂の北側には、大房と小子房からなる僧房がある。十一世紀までには、塔と講堂が焼失し、金堂も維持されなくなったと考えられる。

(1) 宮城県教育委員会・多賀城町『多賀城跡調査報告Ⅰ―多賀城廃寺跡―』（吉川弘文館、一九七〇年）。

(2) 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第4巻 考古資料』（一九九一年）、武田健市「多賀城廃寺」（『月刊考古学ジャーナル』六〇四、二〇一〇年）など参照。
(3) 岡田茂弘「多賀城廃寺の再検討」（『東北歴史博物館研究紀要』5、二〇〇四年）、柳澤和明「発掘調査より知られる貞観十一年（八六九）陸奥国巨大地震・津波の被害とその復興」（『史林』第九六巻第一号、二〇一三年）など。

多賀城の街区遺跡である山王遺跡東町浦地区からは、万灯会などに用いられたと想定される二百点以上に及ぶ、十世紀前半の土器が出土した。そのなかから「観音寺」とある墨書土器が見つかった⁽⁴⁾。平川南氏は、出土地と寺院の間が約2キロと離れてはいるが、周辺にある寺院が多賀城廃寺しかないことから、多賀城廃寺の寺号が「観(世)音寺」である可能性を指摘する。

さて、多賀城廃寺には、関連の深い二つの寺院がある。仙台市の郡山廃寺と大宰府の観世音寺である。

郡山廃寺の存在する郡山遺跡は、七世紀後半から八世紀前半にかけて存続した城柵・官衙である。遺構は、大きく二時期に分けることができる。そのうちのⅡ期官衙について今泉隆雄氏は、陸奥国府とした上で、その創建時期を六九四年の藤原宮遷都から、七〇一年の大宝律令制定より前である可能性が高いと論じた。この国府は、養老四年(七二〇)に蝦夷の攻撃を受け、神亀元年(七二四)創建の多賀城へと移ったと考えられている⁽⁷⁾。

陸奥国府であるⅡ期官衙には、附属寺院があり、それが郡山廃寺である。いわゆる方四町Ⅱ期官衙の南西に立地する。現在、僧坊、講堂、金堂、南門に加えて、塔も想定されている。

この郡山廃寺と多賀城廃寺の伽藍配置や規模が類似することから、国府移転にともない、郡山廃寺と同じ規模で多賀城廃寺が建立されたと考えられている。ひいては、郡山廃寺も同じ観(世)音寺と呼ばれていた可能性が指摘されるのである⁽⁸⁾。

次に、大宰府政庁の東側にあつた観世音寺である。規模や構造の点では、多賀城廃寺や郡山廃寺よりも格上であるが、同じ伽藍配置を持ち、ともに対外関係の窓口としての機能

(4) 多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第4巻 考古資料』(前掲、一五四～一五六、一九一頁)。
(5) 平川南「墨書土器「観音寺」―多賀城市山王遺跡―」『墨書土器の研究』吉川弘文館、二〇〇〇年。なお、九・十世紀創建の寺院であるとすれば、本格的な伽藍を持たないものも多く、検討の余地を残す。

(6) 今泉隆雄「古代国家と郡山遺跡」(『仙台市文化財調査報告書第283集 郡山遺跡―総括編(Ⅰ)―』、二〇〇五年)。

(7) 熊谷公男「養老四年の蝦夷の反乱と多賀城の創建」『国立歴史民俗博物館研究報告』第84集、二〇〇〇年。今泉隆雄「多賀城の創建―郡山遺跡から多賀城へ―」『条里制・古代都市研究』通巻一七号、二〇〇一年。

(8) 『仙台市文化財調査報告書第283集 郡山遺跡―総括編(Ⅰ)―』(前掲)。なお、郡山廃寺の発掘調査の結果、Ⅱ期官衙がなくなったあとも八世紀後半まで維持されたと指摘されるが、今泉氏の指摘のように、基本的な機能は移転したとみるのが穏当である。

をもつ官衙に附属する。創建時期も、大宰府観世音寺と郡山廃寺はほぼ同じと考えられている。⁽⁹⁾

この大宰府観世音寺は、金堂には阿弥陀如来像が、講堂には観世音菩薩像が安置されていた(後述)。菱田哲郎氏は、大宰府観世音寺のように東面する金堂は、西方浄土へと誘う阿弥陀如来像を安置する阿弥陀堂の形式に通じると指摘する。それゆえ、同じ伽藍配置と寺号を持つ可能性のある郡山廃寺や多賀城廃寺の場合、大宰府観世音寺と共通する尊像配置の可能性が指摘されている。また氏は、観世音寺式伽藍配置の起源に川原寺(弘福寺)を指摘しつつ⁽¹⁰⁾、七世紀末に創建された陣内廃寺(肥後国)や夏目廃寺(陸奥国)のほか、七世紀後半創建の大御堂廃寺(伯耆国)、八世紀初頭創建の道成寺(紀伊国)などが、観世音寺式伽藍配置と考えられることから、「東西南北の要衝に布教の拠点として」政策的に配置された可能性があるとした。さらに、『日本書紀』の記述から、郡山廃寺が建立された持統朝には、隼人や蝦夷に対して積極的に仏教普及を図っていることが関わりと指摘する。⁽¹¹⁾

このほかにも菱田氏は、七世紀半ばに『無量寿経』が講説されるなど、阿弥陀信仰が流布していることも観世音寺式伽藍配置の流布に影響を与えていると述べる。他方で今泉氏は観音信仰、特に変化観音が「広くは鎮護国家のために、狭くは諸蕃と蝦夷という国家の敵を鎮圧するために」安置されたと述べている。⁽¹²⁾

以上、伽藍配置と尊像構成を中心に、郡山廃寺と多賀城廃寺に関する研究史を概観してきた。これらの成果を踏まえつつ、これまであまり検討されてこなかった二つの点を取り上げたい。一つは、多賀城廃寺出土塑像と講堂の平面プランの問題であり、いま一つは、

(9) 今泉隆雄「古代国家と郡山遺跡」(前掲)。

(10) 菱田哲郎「古代日本における仏教の普及―仏法僧の交易をめぐる―」(『考古学研究』第五二巻第三号、二〇〇五年)、菱田哲郎「古代日本国家形成の考古学」(京都大学出版会、二〇〇七年)。

(11) 川原寺は、天智天皇が母斉明天皇を弔うため、その宮を寺院に、また大宰府観世音寺も、天智天皇が九州で没した母斉明天皇のために誓願して建立したという。郡山廃寺が造営を開始する時期は、天智天皇の娘にあたる持統天皇の時期にあたり、この点で、七世紀末に天智天皇や斉明天皇と関わる観世音寺式伽藍配置が重視される条件はあったのかもしれない。

(12) 観世音寺式伽藍配置寺院に関するその後の研究は、貞清世里・高倉洋彰「鎮護国家の伽藍配置」『日本考古学』第三〇号、二〇一〇年)、網伸也「道成寺伽藍と古代観音信仰―発掘調査成果と出土瓦からの再検討―」(『経塚考古学論攷』岩田書院、二〇一一年)など。

(13) 今泉隆雄「古代国家と郡山遺跡」(前掲、三〇七・三〇八頁)。

(14) 『常陸国風土記』多珂郡に、「国宰川原宿禰黒麻呂」の時に海岸の「石壁」に「観世音菩薩像」を彫つたとある。志田諱「蝦夷征伐と常陸国」(『常陸風土記とその社会』雄山閣、一九七四年)は、「持統朝ごろ」のこととし、「蝦夷征伐」との関係から「戦争のとき敵の捕虜になつても、観音を念ずれば救われる」との信仰との関わりを指摘する。観音菩薩像と立地からみて、航海との関係も考慮すべきであろう。

塔跡の基壇が、伽藍内の平坦面から約3mの高さがあり、一般的な寺院と比較すると格段に高いことある。いずれも若干の問題提起に過ぎないが、今後の研究の進展に資すれば幸いである。

1. 安置された尊像

(1) 大宰府観世音寺と多賀城廃寺の講堂

多賀城廃寺に安置された尊像を考える上で、大宰府観世音寺を参照したい。なぜなら、多賀城廃寺が大宰府観世音寺に倣って造営されたとするならば、同一の尊像配置である可能性が高いためである。

延喜五年(九〇五)の『観世音寺資財帳』⁽¹⁵⁾によれば、「金堂」には「銅鑄」の「阿弥陀丈六仏像壹軀」と、その左右に「脇土菩薩」⁽¹⁶⁾、さらに「四天王像肆軀」があった。つまり、阿弥陀如来像を中心に、その両脇に観音菩薩像と勢至菩薩像があり、それらを囲むようにして四天王像が配置されていたと考えられる。

「講堂」には、「観世音菩薩像壹軀」と「聖僧壹宇」⁽¹⁶⁾がある。「観世音菩薩像」が、聖観音菩薩像か、変化観音である不空罽索観音像であったか両説ある。⁽¹⁷⁾「聖僧」は、仏の弟子であり、現実の僧侶集団の中でも、理念上首位に置かれる賓頭盧尊者像か文殊菩薩像と想定され、本来は食堂に安置されるものである。澤村仁氏は、観世音寺には食堂がないため、講堂に安置された可能性を指摘する。⁽¹⁸⁾

このほか、金堂・講堂などとは別の区画に「菩薩院」の記述があり、そこには「絵像」

(15) 延喜五年『観世音寺資財帳』(『大宰府市史 古代資料編』二〇〇三年)。

(16) 東大寺二月堂参籠宿所の賓頭盧尊者像は、厨子に入っている。厨子は一般に「基」で数えるが、あるいは「聖僧壹宇」とあるのは厨子に入っていることを指すのかもしれない。

(17) 錦織亮介「観世音寺と不空罽索観音像」(『仏教芸術』一〇八、一九七六年)、猪川和子「筑紫観世音寺観世音菩薩像考」(『仏教芸術』一一〇、一九七六年)など。
(18) 『大宰府市史 建築・美術工芸 資料編』(一九九八年、五三頁、澤村仁氏担当箇所)。宮元長二郎「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」(『日本古寺美術全集 2 法隆寺と斑鳩の古寺』集英社、一九七九年)は、食堂と講堂の相互利用について指摘する。

である「十一面観世音菩薩像壱鋪」があった。

これらのうち、金堂と講堂の記述は、そのまま多賀城廃寺にも適用できそうである。しかし、多賀城廃寺の場合、講堂正面の間数が問題となる。『報告書』によれば、桁行8間・梁行4間（身舎桁行6間・梁行2間の四面庇）の構造をしているという。桁行8間ということ、桁行対梁行の比から、『報告書』は、飛鳥寺講堂や法隆寺講堂に近似することや、桁行8間という点に限って言えば四天王寺講堂や山田寺講堂の例もあることを指摘する。

これら8間の講堂を持つ寺院は、講堂と中門に廻廊等が取り付く寺院と、講堂が廻廊等の外に立地する寺院の二つに分けることができる。後者のうち法隆寺の講堂は、八世紀に「食堂」と呼ばれていた史料がある。原浩史氏が指摘するように、ほかにも現在講堂と考えられている堂舎が、本来食堂であった可能性もあろう。他方で大宰府観世音寺のように、寺号の由来となる尊像を安置する堂舎が、廻廊（あるいは築地塀）の外にあったとは考えにくい。ちなみに、廻廊等が接続する偶数間の講堂を持つ寺院は、四天王寺のみである。

ところで、李炳鎬氏によれば、韓国の古代寺院には講堂が左右に分かれたものがある。百済の陵山里寺跡の場合、講堂の半分には冬用のオンドルが確認された。李氏はさらに、寛弘四年（一〇〇七）八月に四天王寺金堂から発見されたという『四天王寺縁起』（『四天王寺御手印縁起』）に、8間の講堂の半分を「夏堂」、もう半分を「冬堂」と呼んでいることに注目し、四天王寺への百済の影響を論じた。多賀城廃寺に対する百済の影響はともかく、『四天王寺縁起』では、「夏堂」に「金色阿弥陀仏像一軀 丈六」が、「冬堂」に「塞観音一軀」が安置されていたのである。建物正面の柱間が偶数だということは、建物の中心に仏像を安置しようとする、その正面に柱が来てしまう。それゆえ、中心となる尊像

(19) 『報告書』（二四～二六頁）。なお、講堂消失後、桁行5間・梁行4間（身舎桁行3間・梁行2間の四面庇）の建物が建てられるとし、創建時の礎石も動いていることも指摘する。なお、創建時と再建時のいずれの平面想定図にも載らない柱跡がある可能性があり、今後の検討が必要である。本稿では、『報告書』の記載に従って立論する。

(20) 直木孝次郎「法隆寺の食堂と講堂について」（『奈良時代史の諸問題』塙書房、一九六八年、初出一九四三年）は、現法隆寺講堂は、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』でいえば「食堂」に当たると指摘する。

(21) 原浩史「興福寺蔵山田寺仏頭再考―当初の安置堂宇と尊名の再検討を中心に―」（『仏教芸術』三三二、二〇一二年）など。
(22) 李炳鎬「百済寺院の展開過程と日本の初期寺院」（『帝塚山大学考古学研究所研究報告』一四、二〇一二年）。

(23) 佐川正敏「寺院と瓦生産からみた律令国家形成期の陸奥国」（『古代社会と地域間交流Ⅱ―寺院・官衙・瓦からみた関東と東北―』六一書房、二〇一二年）は、竹状模骨が百済で開発され、七世紀初頭の北部九州や百済滅亡後の畿内の丸瓦での使用を指摘する研究を踏まえ、郡山廃寺の軒平瓦に限定しての使用

が二つあった可能性が考えられるのである。⁽²⁵⁾

多賀城廃寺講堂の特色は、郡山廃寺に遡る可能性がある。他方で、大宰府観世音寺講堂の桁行柱間は、奇数間である。それゆえ、中心となる尊像が二体安置されていた可能性のある多賀城廃寺や郡山廃寺の講堂に対して、大宰府観世音寺の講堂の尊像配置は、それと異なっていた可能性がある。

(2) 多賀城廃寺講堂跡出土塑像片

一九六〇年代の調査によれば、講堂跡から、火を受けた複数の塑像片が出土している。『報告書』(七〇頁)には「多賀城廃寺講堂基壇上に堆積する黒色土の中、および北側基壇下の堆積土中から、土塔および壁土塊などと共に塑像の破片も発見された。これらの塑像片は、これは、おそらくは講堂の火災に際して仏像などを搬出する余裕もないまま講堂とともに焼失し、原形もとどめぬような小さな土塊と化してしまったので、復興作業の際に壁土などと一緒に整理されものと思われる。」とある。

これらの塑像は、同時に焼失した塔の塑像である可能性も残るが、『報告書』が指摘するように、出土場所である講堂の尊像と考えるのが穏当である。塑像の作成時期は、講堂の火災時にできた層から出土しており、寺院創建の八世紀前半から火災にあう少なくとも十一世紀までと時間幅が広い。しかし、一般に塑像の作成時期は八世紀頃なので、創建時の彫像である可能性は高い。

ところで、一九七〇年の『報告書』(七〇〜七二頁、図版五六)と、二〇一一年に仙台市立博物館で開催された展覧会図録(以下、『図録』と略す)には、塑像に関する貴重な

について「その系譜については不明であるが、百濟系渡來人の何らかの関与があったのかもしれない」と述べる。

(24)

『報告書』(二五頁)には、講堂などは当初用いていた凝灰岩ではなく、安山岩を用いた修復がされるが、講堂の階段について、「安山岩基壇の階段は前面と背面に一基ずつ残っていた。(中略)階段はいずれも基壇中央にはなくて、南北面とも中央より東寄りの柱間の前に設けられている。これは柱間が8間で中央に柱があったために中央を避けたものと思われる。もともと創建の基壇にはもつと幅の広い階段があったかもしれないが、いまは確かめることができない。」と述べる。

(25)

中央須弥壇後方の仏後壁に当たる部分に、凝灰岩切石の石列が2間分残る。『報告書』(二六頁)は、新しい建物に附属する可能性を指摘する一方で、創建時の可能性も指摘する。

指摘がされている。⁽²⁶⁾ また、実際の遺物のうちのいくつかは、宮城県多賀城跡調査研究所のご好意で観察することができた。そこで、先におもな塑像の紹介をしよう。

なお、『報告書』8」などのように使用している番号は、『報告書』七一頁の第二二図と図版五六、及び『図録』一三頁の図版2の枝番として掲載されたものである。法量を『報告書』の実測図を計測して求めた場合は、約〇cmと記す。

先に、おもに如来像と菩薩像に関するものから見て行きたい。

(i) 螺髪（『図録』2、全長3・8cm）。縦に半分に割れており、本来は砲弾形をしていて。その割れた断面には、細い棒状のものが刺さっていた痕がある。これは、螺髪を仏像の頭部に留めるための軸と考えられ、『図録』の指摘が的確である。さらに『図録』の指摘のように、螺髪が存在は、如来像が安置されていた可能性を示す。

(ii) 蓮弁の一部（『報告書』1・『図録』1、全長九・〇cm）。『図録』では、その大きさから「半丈六程度の仏像の蓮華座の一部」と推測する。蓮華座は一般に、如来像や菩薩像が乗る。ただし、東大寺法華堂弁才天像と吉祥天像（ともに塑像）の場合、足元直下の台よりも一段下の最下部に蓮華が表現されている。そのため、天部に附属する可能性も残る。

(iii) 瓔珞か天衣（『報告書』8、全長約5cm）。実見していないが、『報告書』は、「両面にレリーフ」があり「漆状の付着物」がみられるとし、装飾品である瓔珞か、天衣の一部ではないかと指摘する。菩薩像が身に着けていた可能性もある。

(iv) 宝髻の一部か（『報告書』9、全長約3cm）。実見していないが、『報告書』の指摘である。菩薩像か、天部像の可能性がある。

(26) 仙台市博物館『東日本大震災復興祈念 仙台市博物館開館50周年特別展 仏のかたち人のすがた―仙台ゆかりの仏像と肖像彫刻―』（二〇一二年一三・一二頁）。

次に、おもに天部の尊像に関わるものである。

(v) 爪形のある獣足の一部（『報告書』7・『図録』9、全長七・〇cm）と獣足の一部（『図録』8、全長四・八cm）。ともに裏側は平坦で、彫像の最下部にあるべき邪鬼と指摘されている。『報告書』は、爪形のある獣足から、邪鬼の大きさを「60〜100cmほど」と推測する。邪鬼の存在は、四天王像の存在を示す。

(vi) 肩の部分か（『報告書』3、約11cm）。『報告書』は「天部の短甲の一部かと思われる」とし、約1・5mの像と推測する。

(vii) 靴の先が、二点出土している。一点は、先端に向けて丸くすぼまる（『図録』6、全長6・8cm）。もう一点は、上部にやや反り返った平坦面をもつ（『報告書』5・『図録』5、全長4・7cm）。ともに中空で、内側には木の型が当たっていた痕が残る。塑像を支える骨組みの跡の可能性がある。靴の形態と大きさが、それぞれ異なるので、形状からみて前者が四天王像のものだとすると、別に天部の彫刻があった可能性が推測される。『報告書』では、後者を「吉祥天か弁才天の杵」と推測する。梵天や帝釈天などの可能も残るであろう。

(viii) 髻を結った像の後頭部（『報告書』2・『図録』3、全長11・4cm）。頭部に髻を結っている。『報告書』では、吉祥天や弁財天などの可能性を指摘する。『図録』ではほかに「他の破片と異なり塑土は薄手で中空となっている」点を指摘する。厚さは、場所によって異なるが、三箇所を計測した限りでは6〜8mm（『報告書』は4〜6mmとする）である。

ところで、一般に塑像頭部が割れた場合、その断面は不整形になると想像される。しか

し、本塑像片は、多く人工的と思われる平面的断面を残す。「中空」と表現されるが、平面的な断面に注目し、全体的な形状を観察すると、後頭部は当初、椀状であった⁽²⁷⁾。加えて、観察が正しければ、内側には指による調整痕がある。以上の点から、心木に粘土を加えてモデリングしたのではなく、顔面部と後頭部をそれぞれ椀状に作り、最後に両者を合わせた可能性がある。表面が整形されていることから、単なる型押し⁽²⁸⁾ではないものの、型が存在した可能性は残る。これに関連して、『報告書』が掲載する次の資料の解説が注目される。

(ix) 模様のある薄手の作（『報告書』16、全長約5cm）。実見していないが、『報告書』は「焼きが堅緻で、薄手の作で、スサは入っておらず型おしの手法が認められ、裏面には指紋も若干認められる」とする。断面図は、ゆるやかに3字型に湾曲しており、厚さからみても、埴仏ではないと思われる。なお、薄手と述べる厚さは、実測図から計測すると5mm前後であり、(viii)の人物後頭部と共通する。両片の関係は、今後の課題としたい。このほかにも、衣文の一部や腕と思われるものが見つかっている。多賀城廃寺の遺物は、塑像に限らず、今後総合的な調査が望まれる。

さて、以上の塑像片からは、如来像と四天王像のうちの少なくとも一体があったことは確実である。そのほかにも、菩薩像や、吉祥天像・弁財天像があったかと推測される。もちろん、塑像以外の仏像が講堂の中心にいた可能性も否定できないが、塑像の如来像があるため、少なくとも塑像を中心とした一群があったとみてよい。それゆえ、塑像から見る限り、『凶録』解説が「これらの破片から想像される堂内の尊像構成は、如来像を中心に、菩薩・天部・四天王といった尊格の塑像群像であり、古代寺院における典型的な構成であったと考えられる。」との指摘は従うべき点が多い。しかし、大宰府観世音寺講堂の尊

(27) 椀の形をしている点は、東北歴史博物館で実見の機会を得た時に、調査に同行した相澤秀太郎氏の確かな指摘による。

(28) 長岡龍作氏のご教示による。また、出土塑像など多くの点でご教示を得た。

(29) 塑像の型押し技法については、向井佑介氏と平松良雄氏からご教示を賜った。なお、岡村秀典・向井佑介編「北魏方山永固陵の研究―東亜考古学界1939年収集品を中心として―」（『東方學報 京都』第八〇冊、二〇〇七年）、向井佑介「北魏平城時代の仏教寺院と塑像」（『仏教芸術』三二六、二〇一一年）など参照。

(30) 出土塑像は、『天平の地宝』（朝日新聞社、一九六一年）や『前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査報告 山王廃寺 山王廃寺等V遺跡発掘調査報告書』（二〇〇〇年）など参照。管見の限り、類似するのは厚さ約4mmで「中空」と指摘される『凶録』掲載の福島県美里町山内遺跡出土塑像がある。塑像の作成技法の検討は今後の課題としたい。なお、型押しなら量産を目的とした可能性もあるが、乾燥を早めるために薄手に作成した可能性も推測される。

像や先の講堂の柱間を合わせて考える必要がある。

(3) 検討

多賀城廃寺講堂の構造と、出土塑像から復元された尊像構成、そして大宰府観世音寺講堂のように中心に観音菩薩像があったとする理解、この三者はこれまで個別に検討されてきたが、互いに整合性はなく、相互に参照すべきだと考える。出土塑像の本来の安置場所が講堂といえるのか、あるいは多賀城廃寺講堂は桁行8間でよいかなど、基点となる事実の問題がないとすれば、少なくとも大宰府観世音寺と多賀城廃寺の講堂の尊像配置は全く一致する訳ではないといえよう。

さらに推測を交えることが許されるならば、多賀城廃寺講堂には、一つは如来像、もう一つは、菩薩像の二尊が中心にあった可能性⁽³¹⁾がある。多賀城廃寺の寺号としては、かつて地名から称えられた弥勒寺説も顧みるべきだが、なお観(世)音寺である可能性は高い。それゆえ、講堂尊像のうち、一体の菩薩像があるとすれば、それは観音菩薩像である可能性がある。このほかに、少なくとも四天王像のうちの一体と、また少なくとも一体の天部像が存在していた。加えて、大宰府観世音寺と同様に、本来食堂に安置されるべき「聖僧」も、講堂に安置されていたかもしれない。

大宰府観世音寺と尊像配置が異なるのならば、それは、蝦夷と対面する寺院としての特色であったのか、また、郡山廃寺との相違であったのかは、今後の検討課題である。

(31) 持統天皇の時に「陸奥蝦夷沙門自得」が求めた仏像は、「金銅」の「薬師仏像」と「観世音菩薩像」であった点(『日本書紀』持統三年七月壬子朔条)も想起される。

2. 塔と景観

(1) 多賀城廃寺の塔

郡山廃寺と多賀城廃寺が、陸奥国府の付属寺院であるということは、塔・金堂・講堂に加え、僧房まで存在するその整った伽藍配置からもうかがうことができる。その中でも、三重と考えられている塔の存在に注目したい。

近年、網伸也⁽³²⁾氏は、寺院を景観という視点から論じた。たとえば、塔と金堂、講堂が一直線に並ぶ四天王寺式伽藍配置は、中門や南門などのある伽藍正面から見ると、側面からみた景観が重視されたのであり、摂津国の四天王寺の場合、寺院の西側に広がる海上からの景観や、東側の陸路からの景観が重要であったと指摘する。このような寺の景観を重視する視点は、塔の景観的な側面を重視すると言い換えることもできよう。

多賀城廃寺の場合はどうだろうか。『報告書』(一九頁)では塔について、「現在残っている塔の土壇の高さは約3mあつて、塔の基壇としては異常に高いものであるが、これは高さ約1mの人工的に積上げた土壇の上に、高さ約1・36mの基壇を築いたものに土がかぶさつて一体になっているものであることが発掘の結果あきらかになった。このような例は全国的にもほとんど知られていない。」と指摘する。なぜそのように高い基壇が必要であったかの直接的な説明は、管見の限り見当たらないが、景観的な視点も有効かと考えられる。⁽³³⁾

網氏の指摘に従えば、多賀城廃寺の伽藍配置を考えると、塔と金堂が並立する様子を見ることが出来る寺院正面、つまり南側からの景観が重要であったと思われる。ただしこの

(32) 網伸也「景観の見地からの伽藍配置」(『月刊考古学ジャーナル』五四五、二〇〇六年)。

(33) 他の寺院でも、当麻寺や室生寺など山の寺院の塔との比較が有効である。

ような景観は、多賀城廃寺が、多賀城と同様、丘陵上に立地するため、多賀城廃寺の近く、例えば中門あたりに来ないという意味がないように考えられる。むしろ、丘陵上に立地するため、もっぱら塔を遠望するという点が重要であったと想像される。

それでは、どのような地点からの景観を意識していたのだろうか。三つの点が考えられる。

一つは、多賀城の城内からの景観である。多賀城に勤務する官人たちや多賀城を訪れた蝦夷たちにとって、多賀城廃寺が見えるということに意味があったと想像される。

もう一つは、多賀城廃寺の正面、つまり南面からの景観である。多賀城廃寺創建期の多賀城廃寺南方の様子はよくわからないが、八世紀後半から九世紀初頭には多賀城南面の南道路に沿って、直線的な河川改修がなされており、この河川は湊浜から外洋に接続する可能性が指摘されている。⁽³⁴⁾ 物資の運搬に利用された河川や津、あるいは海岸沿いを往来する舟からも塔を臨むことができたと考えられる。

最後に、多賀城廃寺の西側、つまり多賀城街区が形成された地域からの景観である。多賀城廃寺が、観世音寺式伽藍配置をとることと、現在立地する丘陵に建立されることの両者を前提とする限り、街区からの塔の眺望は、金堂の陰に隠れる可能性がある。そのため、塔の基壇のみ約3mとする必然性もあつたと想像される。

多賀城廃寺の南北の軸はやや傾いている。この傾きは、八世紀後半に確認できる東西道路と直交することから、その関係は多賀城創建期に遡る可能性も指摘されている。⁽³⁵⁾ いずれにしても、陸路を選択した場合、南北に通じる東山道を東に折れて、多賀城に向かう時、最初に目にするのは、正面に見えた多賀城廃寺の塔であろう。多賀城廃寺の塔に向かって

(34) 武田健市「多賀城廃寺と多賀城南面の様子」、『第36回古代城柵官衙遺跡検討会 資料集』二〇一〇年、永田英明「古代南奥のみちと政治」、『講座東北の歴史 第四巻 交流と環境』清文堂出版二〇一二年。

(35) 高倉敏明『多賀城跡—古代国家の東北支配の要衝—』(同成社、二〇〇八年、一三六頁)。

進むと、やがて左手に多賀城を臨みながら多賀城正面の南北道路に到着したのである。

また、多賀城街区で暮らす人々は、常に塔を仰ぎ見ていたと考えられる。多賀城街区の山王遺跡で見つかった「観音寺」の墨書土器や同時に出土した大量の皿は、十世紀における万灯会などの開催を示すと考えられている。それは、灯火が照らす多賀城廃寺のとくに塔を眺望できる場所で、使用されたのかもしれない。

以上のように、多賀城城内や街区、あるいは海上交通や河川交通、陸上交通路から、多賀城廃寺、とくにその塔を臨むことができたと考えられる。この塔は、多賀城廃寺自身だけでなく、国府である多賀城の威容にとつても重要な役割を果たしたことはいうまでもない。⁽³⁶⁾

(2) 陸奥国と塔

多賀城廃寺の前身寺院である郡山廃寺は、郡山遺跡そのものがそうであるように、平坦面に立地しているが、景観的視点での分析も有効だと考えられる。郡山遺跡のⅠ期官衙は、南北の軸が西に60度傾いているが、それは広瀬川と名取川の合流点を向いているためといわれる。⁽³⁷⁾一方、方四町Ⅱ期官衙はほぼ正南北に建てられ、その南面の西寄りに郡山廃寺が立地する。多賀城廃寺と同様、官衙内や官衙に向かう南面道路からの景観と、海上交通あるいは水上交通からの眺望、さらには遺跡の西側を南北に通っていた東山道からの眺望など、いずれも陸奥国府の威容を示すには必要な役割を担ったと考えられる。

陸奥国の国分寺に七重塔が建立されるまでは、名取川以北で塔を持つ寺院は、郡山廃寺と多賀城廃寺しか確認されていない。大崎平野には、伏見廃寺や一ノ関廃寺、菜切谷廃寺

(36)

『報告書』第7章結言では「多賀城の前面の小さい丘、木々の緑の間に建てられた瓦葺丹塗の壮大な建物群は仙台平野の遠くからも、仰ぎ見ることが出来たであろう。ことに金色の相輪の輝く三重の朱塔はひときわ目立って眺められたにちがいない。それははじめて見るみちのくびとにとつてどんなにか美しいものに感ぜられたか想像にあまりある。寺院はほとの殿堂としてよりも、都の文化の表徴として、または国家の権威の具象的な表現として受取られたであろう。多賀城廃寺は内には国家の安泰を祈る寺院であるとともに、外に対しては国家の権力を文化的にアピールするものであった。」と景観的視点を含む論述がある。

(37) 『仙台市文化財調査報告書第283集 郡山遺跡―総括編(1)―』(前掲)など。

などがあるが、いずれも現在確認された範囲では一堂形式である。⁽³⁸⁾

名取川より南の地域でも、調査によつて八世紀に遡る塔を持つことが明らかにされた寺院は意外に少ない。八世紀前半に、周辺の遺跡からも孤立して、塔のみが建立されたという福島県二本松市郡山台遺跡⁽³⁹⁾のほか、郡山廃寺と創建時期の近い、福島県白河市の借宿廃寺と福島県いわき市の夏井廃寺である。両寺は、七世紀末から八世紀初頭にかけて建立された寺院であり、地域の有力豪族を主体とする造営と考えられ、郡衙に隣接していた。

借宿廃寺⁽⁴⁰⁾は、塔と金堂、講堂が確認され、法隆寺式伽藍配置と考えられる。阿武隈川を挟んだ北対岸に白河郡衙と考えられる関和久遺跡・関和久上町遺跡がある。また、東山道が近くを通過している可能性がある。水上交通や陸上交通の点からも、借宿廃寺が重要な立地にあつたと考えられる。

夏井廃寺⁽⁴¹⁾は、南を正面とすれば、変形の観世音寺式伽藍配置をしている。寺院のすぐ南と西には丘陵が迫り、その比高20mほどの小丘陵上には、石城(磐城)郡衙(根岸遺跡)が立地する。他方で、夏井廃寺は、丘陵直下にあるため、郡衙のように良い眺望が得られる訳ではなく、とくに正面の南側と、西側からの景観は妨げられていた。そのため北側(夏井川側)と東側(海側⁽⁴²⁾)からの視点が重視されている。夏井川は、上流に夏井廃寺の瓦を焼いた瓦窯があり、その運搬に河川が利用されただけでなく、夏井廃寺と同じ川の南岸には、大規模な倉庫群や首長墓などがある。また、近隣の荒田目条里遺跡出土木簡には「立屋津」という記載があり、夏井川に津が想定されている。⁽⁴³⁾さらに夏井廃寺からみて、夏井川対岸真北をのちの東海道が南北に直進していた可能性があることも興味深い。東海道を南下する時、夏井廃寺が正面に見えた可能性がある。

(38) 佐川正敏「東北地域の寺院造営―多賀城創建期以前の寺院―」(帝塚山大学考古学研究所『天武・持統朝の寺院造営―東日本―』二〇〇八年)、同「寺院と瓦生産からみた律令国家形成期の陸奥国」(前掲)は、伏見廃寺跡から、三種セツトの瓦が出土することから、一堂ではなかった可能性を指摘する。今後の調査の進展を期待したい。

(39) 『二本松市文化財調査報告書第一集 郡山台一』(一九七七年)など。なお、宮城県名取市の笠島廃寺にも塔があるが、創建時期が明確ではない。加藤孝「宮城県名取郡笠島廃寺跡」(『日本考古学年報4』(昭和26年度)一九五五年)参照。

(40) 『白河市埋蔵文化財調査報告書第55集 借宿廃寺跡』(二〇一〇年)など。

(41) 『いわき市埋蔵文化財調査報告 第107冊 夏井廃寺跡』(二〇〇四年)など。なお、報告書(二四一頁など)では、金堂・講堂に比べ、塔の完成が八世紀前半と遅れたとするが、佐川正敏「東北地域の寺院造営―多賀城創建期以前の寺院―」(前掲)、同「寺院と瓦生産からみた律令国家形成期の陸奥国」(前掲)は塔のみ後れたとする説を否定する。なお、観世音寺式伽藍配置と考えると、講堂と金堂が直線的に並び、塔が東に偏っている。佐川氏は、地形的な制約とするが、塔の景観を考慮し、講堂の造営を行った可能性がある。

(42) 猪狩みち子「古代磐城郡家における区画施設について」(『舟楫林の考古学―大竹憲治先生還暦記念論文集―』二〇一一年)などによれば、夏井廃寺東方から「平安時代」の区画溝や建物跡が出土しており、東側からの景観という点は今後検討の必要がある。

(43) 『いわき市埋蔵文化財調査報告 第七五冊 荒田目条里遺跡』(二〇一一年)など。

ところで、佐川正敏⁽⁴⁴⁾氏は、七世紀第三四半期に造営が始まる福島県相馬市の黒木田遺跡と福島県福島市の腰浜廃寺は、宇多評と信夫評に立地し、立評期の「浜通り地区（後の石城）」と「中通り地区（後の石背）」のほぼ北端にあることから、「陸奥国北端」・「倭国北端」に位置する寺院とし、倭国による対蝦夷政策を読み取る。また、郡山遺跡Ⅱ期官衙とほぼ同時期に造営された寺院を検討するなかで、観世音寺式伽藍配置の夏井廃寺が、石城郡にある理由を「当時倭国の東端」であった可能性に求めた。どのような意味で「東端」なのか分りにくい⁽⁴⁵⁾が、石城郡が東海道の終点となった常陸国へ所属していることを指すようである。

石城郡は、『続日本紀』養老二年（七一八）五月乙未条の石城立国時に同国所管となる以前には、陸奥国の海道最南端の郡であった。遡って『常陸国風土記』には、「癸丑年」（六五三）に、多珂評を「多珂」と「石城」の二郡（評）に分け、「石城郡、今存陸奥国堺内」とある。どの時点で、陸奥国所管となったかは議論があるが、天武年間の国堺画定作業までには陸奥国に所属していた可能性が高い⁽⁴⁶⁾。つまり夏井廃寺造営当時の石城評（郡）は、「倭国の東端」というよりも、陸奥国の南端の可能性がある。いずれであったとしても、石城郡は、海上・水上・陸上交通路の結節点にあり、陸奥国の出入り口、あるいは陸奥国への出入口に立地していたとはいえよう。

さて、少なくとも養老二年五月の時点で、郡山廃寺とともに陸奥国内で最初に塔が建立されていたと考えられる借宿廃寺と夏井廃寺は、白河郡と石城郡の郡衙と強い関連を持っている。寺院造営が開始された時、白河郡と石城郡は少なくとも陸奥国南端の境界付近に立地していた。陸奥国では、八世紀の伽藍配置が明確な寺院でも、塔があまり確認されて

(44) 佐川正敏「寺院と瓦生産からみた律令国家形成期の陸奥国」（前掲）。

(45) 紅葉山文庫本『令義解』関市令裏書には、「古記云、東辺・北辺、謂陸奥・出羽等国也。」とある。

(46) 今泉隆雄「陸奥国と石城郡」（『いわき市埋蔵文化財調査報告 第72冊 根岸遺跡―磐城郡衙跡の調査―』二〇〇〇年）は、癸丑年より陸奥国所管となつたと論じる。鐘江宏之「国」制の成立―令制国・七道の形成過程―（『日本律令制論集』上巻、吉川弘文館、一九九三年）。

いないことを踏まえると、借宿廃寺は、陸奥国の山道の出入口にあたっているからこそ塔があつたのではなからうか。また夏井廃寺も、創建時に陸奥国の所属であれば、借宿廃寺とともに、陸奥国南端の海道の出入口として、もし常陸国の所属であつたとしても、海道の出入口にあたっているからこそ、塔の建立が行われたのではないかと推測する。⁽⁴⁷⁾

以上、七世紀末から八世紀初頭にかけての陸奥国の塔に注目すると、倭・日本の最北端の塔として郡山廃寺が存在していた可能性があり、国府附属寺院は、その景観も重要であつたと想像される。同時期に、陸奥国内の寺院のうち確実に塔をとまなう寺院は、わずかに陸奥国の南の境界にある借宿廃寺と夏井廃寺であつたことに、政策的な意図を推測した。

おわりに

多賀城廃寺を二つの点から分析を行った。これまでの観世音寺式伽藍配置をめぐる議論を踏まえた上で、出土した塑像片と講堂桁行の間数から、多賀城廃寺の講堂に対して、必ずしも従来の議論すべてが当てはまる訳ではないという点を示した。また、多賀城廃寺の塔基壇が高いことから、景観に着目して議論する必要性を指摘し、あわせて陸奥国内における塔配置に政治性がみられる可能性について言及した。

最後に、多賀城廃寺の法会について補足して稿を閉じたい。すでに指摘される十世紀の万灯会のほか、多賀城廃寺とその周辺からは、「花会」と記された九世紀の墨書土器が二点出土している点が目玉を引く。⁽⁴⁹⁾ 正倉院文書には、天平神護三年（七六七）四月六日「花会

(47)

窪田大介「七・八世紀陸奥国の郡衙周辺寺院とその意義」『古代東北仏教史研究』法蔵館、二〇一一年）は、夏井廃寺の堂舎のうち、塔の建立が遅れ、かつ塔基壇が、郡山廃寺や多賀城廃寺の塔基壇よりやや大きいと理解した上で、養老二年の石城国立国にもない、郡衙附属寺院から国衙附属寺院となつたため、塔が建立された可能性を指摘する。
『須賀川市文化財調査報告書 第59集 上人壇廃寺跡』(二〇一一年)の第七章総括で、岡田茂弘氏は、上人壇廃寺に塔がなかった理由として、借宿廃寺や夏井廃寺に遅れ、八世紀第二四半期頃に創建されたことによる時代背景などを指摘する。

(48)

(49)

多賀城市史編纂委員会『多賀城市史 第4巻 考古資料』(前掲、三九一頁)、『多賀城市文化財調査報

唐楽所解」があり、その月日からみて、この「花会」は四月八日の仏誕会と考えられる。「花会」は他の法会を指す可能性もあるが、仏誕会は最も一般的な法会の一つであり、多賀城廃寺で行われた「花会」としては、適当な理解であろう。

また、観音菩薩像に対する悔過法会が営まれたことも間違いない。『続日本紀』天平十二年(七四〇)九月己亥条には、藤原広嗣「討伐」に関わって、陸奥国も含む諸国に「国別造」観世音菩薩像壹軀高七尺「并写」観世音経一十卷」を命じている。⁽⁵⁰⁾ 変化観音であるか否かは問題だが、「願依」聖祐、「欲」安「百姓」と、少なくとも、直接的な戦勝祈願を掲げない点は注意すべきである。多賀城廃寺での悔過法要の検討は、なお今後の課題である。

告書第65集 高崎遺跡―新田南錦町線関連遺跡発掘調査報告書」(二〇〇二年)など。

(50) 『大日本古文书』第二七卷(七一・七二頁)・『続々修』四四帙一〇。

(51) 「写書所食口帳」(『大日本古文书』第一一巻、二二九・三〇頁)、『続々修』三八帙一)の天平勝宝二年六月食口に「百卅八人供奉礼仏并花会」などである。後の東大寺六月の恒例法会に「万花会」や「千花会」(『東大寺要録』巻四)があり、こうした法会の可能性もある。

(52) 長岡龍作「悔過と仏像」(『鹿園雜集』第六号、二〇〇六年)参照。

(謝辞) 多賀城廃寺出土塑像などの実見にあたり、宮城県多賀城跡調査研究所の吉野武氏に御世話になった。末筆ながら感謝の意を申し述べたい。

(追記) 本稿は、二〇一二年一月一日に、上廣歴史資料学研究部門・岩出山古文书を読む会共催「講座・地域の歴史を学ぶ」における「多賀城廃寺を考える」と題した講演をもとに成稿しており、内容は基本的に当日の講演と同じである。同日に「古代東北における塔と伽藍―白山廃寺と国見山廃寺から平泉中尊寺へ」と題するシンポジウムが開催された。本稿において参照できなかった点をお詫びしたい。

(付記) 本稿は、二〇一〇一六年度・科学研究費基盤研究(A)・研究課題番号二三二四二〇五〇による研究成果の一部である。